

おおこうち
大河内

しょう
昌

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文第236号
学位授与年月日	平成19年2月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
最終学歴	昭和62年3月 東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程退学
学位論文題目	美学イデオロギー —シャフツベリーからコールリッジへ
論文審査委員	(主査) 教授 原 英 一 教授 尾 崎 彰 宏 教授 中 村 捷

論文内容の要旨

本論文の目的は、シャフツベリー (Anthony Ashley Cooper, the third Earl of Shaftesbury) からコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) までの美学に関係するいくつかのテキストを精読することによって、18世紀からロマン主義の時代にかけてのイギリスの理論的言説が取り組んでいたイデオロギー的な問題を解明することである。本論文では、道徳哲学、政治経済学、美学、詩、文学批評といったさまざまなジャンルに属するテキストが分析の対象となる。従来は、道徳哲学や政治経済学といった18世紀の理論的言説とロマン主義の言説が、共通の基盤の上で議論されることはあまりなかった。というのは、道徳哲学や政治経済学はイギリス社会の産業化と商業化がもたらした現実的な問題と取り組んだ実践的な理論であり、ロマン主義は現実の社会的状況を超越した理念や霊的な実体に憧憬する観念論的で逃避的な文学運動であるという通念があったからである。しかし、18世紀の社会理論の言説とロマン主義の言説の間には、いくつかの大きな共通点がある。共通点のひとつは、両方の言説がともに、商業と徳の関係の問題に取り組んでいるということである。二つめの共通点は、両者がともに想像力 (imagination)、情念 (passion)、共感 (sympathy)、趣味 (taste) といった人間精神の想像的能力の解明に努力を傾注しているということである。商業、徳、想像力、情念、共感、趣味といったいくつかのキーワードに注目しながら18世紀イギリスの主として理論的なテキストを読解することによって、経験論的な認識論や道徳哲学が支配的であったイギリスの知的な風土から、どのようにロマン主義が現れたのか、またそれは18世紀の理論的な言説から何を受け継ぎ、何を拒絶したのかがあきらかになるのである。

本論文の第I部でとりあつかうヒューム (David Hume) やアダム・スミス (Adam Smith) は、いわゆるスコットランド啓蒙思想に属するとされ、その合理主義的で実用主義的な思想が、イギリスの商業化と

産業化の正当化理論として機能したことは、思想史上の常識である。しかし、社会の世俗化と合理化を推進した彼らの道徳哲学や政治経済学の言説を一貫して特徴づけるのは、近代の市民社会を統制する原理として理性ではなく、情念や感情を重視する姿勢なのである。シャフツベリーは、そうした姿勢を最初に定めた文人として重要である。これらの18世紀イギリスの道徳哲学者たちが、感情を理性よりも上位に置くことには大きな理由がある。本論文の中であきらかになるように、当時の社会理論においては、商業の発展は人間の情念や想像力によってうながされると考えられていた。それゆえ、商業を擁護するということは情念や想像力を擁護することを意味したのである。18世紀イギリスでもっとも先鋭な合理主義を推し進めたのはヒュームであろうが、彼の目的は合理主義的な懐疑論をあらゆる分野で貫徹することではけっしてなかった。彼はむしろ理性が有効性をもつ領域をきびしく限定し、日常世界においては理性ではなく情念が支配的となるべきであるということを主張したのである。だが、個人が情念にしたがって自由に利益を追求することを是認するような社会はかならずや墮落するだろうという考え方も、根強く存在していた。ポーコック (J. G. A. Pocock) が指摘するように、商業と徳の両立可能性がこの時代の社会理論における争論の中心的なテーマとなったのである。道徳哲学、政治経済学、美学といった18世紀イギリスを特徴づける理論的探求は、個人主義化、商業主義化が進展する社会において、美德や社会秩序といったものがどう確保されるのかという問題に取り組んだ言説にほかならない。こうした論争の文脈の中で、商業と徳の両立可能性を主張するアディソン (Joseph Addison)、ヒューム、アダム・スミスといった文人、思想家たちは、商業の推進力である想像力は、それ自体の中に道徳的な原理を内包しているということを証明する必要に迫られたのである。アダム・スミスの「道徳感情」の理論もヒュームの「趣味」の理論も、理性の権威に頼ることなく、想像力それ自体の洗練によって想像力の暴走を抑制するような倫理的な原理の探求にほかならない。美学の言説もまた、ケイムズ (Henry Home, Lord Kames) やパーク (Edmund Burke) に見られるように、人間が外的世界に対してもつ多様かつ微妙な感情を記述し分類することに取り組んだが、その企画の背景には、理性の権威を導入することなく、感受性や趣味や礼儀作法の洗練によって社会の秩序と調和をたもとうとする、市民社会の理想が存在したのである。美学は道徳哲学とともに、感情と感受性の有り様を微細な部分にいたるまで精査することで、感情の領域を支配し統制しようとしたのである。

当然のことながら、ロマン主義の想像力理論の背景には、こうして形成された18世紀の想像力と感受性の理論が存在している。とくに、商業と徳の両立可能性の問題は、ロマン主義においても依然として中心的な問題であった。しかし、ロマン主義の時代においては、神学や公共的な徳といった伝統的な価値から商業を擁護するということは、そもそも問題ではない。コールリッジが診断するように、フランス革命後の時代においては宗教的、封建的な価値を代表する階級は、もはや商業的階級に対抗するような政治的な力を失いつつあったのである。商業の力がすでに伝統的な価値観を圧倒するほどに膨れ上がってしまったことは、だれの目にもあきらかだった。ロマン主義の詩人や文人たちは、むしろ商業の圧倒的な力に対抗するものとしての想像力の理論とイデオロギーを練り上げようとする。そうしたイデオロギー的なところみの中で、ロマン主義はもはや過去のものとなってしまった宗教的、封建的、地域共同体的な価値を呼び起こすが、言うまでもなく、それは政治的な権力としてではない。伝統的な価値は政治的な力ではなく、想像的あるいは文化的な力として利用されるのである。ロマン主義は伝統や文化的な記憶から、圧倒的な力をもってしまった商業に対する対抗イデオロギーを形成しようとする。だが、重要なことは、ロマン主義のイデオロギーは、商業活動の価値を否定して伝統的な価値への回帰をうながすような、短絡的なものではないということである。とくに成熟期のワーズワス (William Wordsworth) やコールリッジに見られるのは、商業活動の国家的な意義を認めながらも、それと共存しうるような永

遠の価値や普遍的な意味が支配する領域—レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) の言葉を借りるなら「文化」(culture)の領域—を、近代社会そのものの中に切り開こうとする企てである。これはたんなる現実逃避や時代錯誤的な伝統回帰ではなく、商業と文化を近代国家の両輪として位置づけようとする企画なのである。

本論文は3部10章からなる。第1部は18世紀イギリスの道徳哲学、政治経済学、美学における想像力と情念の問題をみつめている。第1章ではシャフツベリーを検討する。シャフツベリーが取り組んだ課題は、個人的な情動 (affection) が道徳的判断の妥当な根拠となることを証明することであった。そうした理論的探求を要請したのは、イギリス社会の世俗化と商業化にともなう新しい道徳理論の必要性であった。近代的な商業社会は人間の欲望や野心といった情念を肯定する社会である。だが、欲望や野心といった私的な情念を解放する社会は、同時に徳ある社会でありえるのであろうか。また、私的な利益の追求を是認する社会は、そもそも秩序と安定を保ちえるのであろうか。シャフツベリーは、こうした問題に対して解答を与えようとしたのである。換言するなら、シャフツベリーが取り組んだ問題は、私的な情念と公共的な徳の両立可能性の問題なのである。彼の主著である『諸性格』(Characteristicks)の中に見出せるのは、道徳哲学を神学的言語から解放し、新しい市民社会に相応しい道徳理論を生み出そうとする努力である。シャフツベリーの思想の中核にあるのは、美と徳はともに感覚によって知覚される基本的に同一の性質と見なす考え方である。シャフツベリーは美徳を「内面的な美」と定義し、美を愛する人間の自然な情動の上に道徳原理を基礎づけようとする。徳の問題を美の知覚に関する語彙によって記述することは、道徳を神学から切り離す決定的な契機となったのである。シャフツベリーはまた『諸性格』において、美と公共善を愛するように「内的対話」とおして情念を「訓練」する方法を提案している。そうした訓練をとおして、世俗的な市民社会に相応しい理想的市民像あるいは近代的な主体の姿が浮かび上がってくるのである。

第2章ではヒュームの「趣味」の理論に焦点を当て、近代社会が社会の統制原理を感受性や趣味といった想像的能力の中に必然的に求めてゆくその理由を解明する。18世紀イギリスの社会理論の特徴は、社会を統制する原理を理性ではなく「感受性」、「空想」、「共感」といった想像的な能力に求めることである。ヒュームも同時代の他の道徳哲学者と同様に、理性によって市民社会を統治する可能性を否定する。それは、理性の権威によって市民に公共的徳の理想を強制することは、商業社会の活力を枯渇させると彼が考えていたからである。欲望や野心といった情念は、悪徳であるどころか商業社会の繁栄と福祉にとって必要不可欠なものなのである。だが、ヒュームも商業社会の駆動力である情念は、理性の歯止めがなければ、暴走する危険がつねにあることは認識していた。ヒュームは情念の暴走を抑制する原理は、洗練された趣味の中に求められるべきであると考えている。ヒュームが「趣味」と呼ぶものは、近代の市民社会を統制する非合理的な原理なのである。だが、ヒュームにとって非合理的であることは、有効性がないということの意味しない。なぜなら、洗練された感受性は哲学よりも賢明でありうるからである。感受性の洗練によって商業社会は、公共的徳の思想や法の強制力を導入することなしに、慣習と礼儀作法によって統治されることが可能となるのである。ヒュームが描く市民社会は想像力によって統治されるという意味で、徹頭徹尾美学化された社会である。ヒュームの美学理論を分析することによって、趣味や感受性といった概念が、文芸や芸術の領域だけでなく、公信用や財産権といった市民社会の中核機構を統括する原理であることがあきらかになるのである。

第3章はヒューム、アダム・スミス、バークのテキストをみつかう。ヒュームと同様にスミスもまた、近代的な市民社会の統制原理は、理性ではなく想像力に求められるべきであるという確固とした信念をもっている。なぜなら、彼らは、商業は想像力がもたらす幻想や事実誤認によって促進され、拡大する

と考えているからである。だが彼らは同時に、認識論的に不安定な想像力が社会の統制原理となることからさまざまな問題が発生することに気づいており、想像力を洗練させることによって想像力の不安定性から生じる社会的な問題を解決しようとするのである。彼らの理論の核心にあるものは、商業社会に道徳的墮落をもたらす粗野な想像力と、社会に調和と秩序をもたらす洗練された想像力を区別しようとする努力である。だが、彼らの議論を精読することによって浮かび上がってくるのは、粗野な想像力と洗練された想像力を区別することのむずかしさである。そもそも想像力は現実に存在しないものを「構想する」能力である以上、合理的な規準なしで、良き想像力と悪しき想像力を弁別することはきわめて困難なのである。それがヒューム、スミスのみならず、18世紀イギリスの道徳哲学全体の中心的なジレンマとなる。そうした文脈の中にバークの崇高美学を位置づけることで、美学が根本的にもっているイデオロギー的な性格が浮かび上がってくるだろう。とくにバークの崇高美学が奢侈の批判と労働倫理の賞賛と結合している点を分析することによって、バークの崇高美学が、個人的な感受性と公共的な倫理性を結びつけるための、ひとつの結節点を形成していることがあきらかになるのである。

第4章はマルサス(Thomas Robert Malthus)の人口理論を、それが内包する美学的な戦略という観点から分析する。マルサスの『人口論』(*An Essay on the Principle of Population*)は、政治と経済に関する学問分野を、数学と統計に基づいた科学の地位に高めようという構想に基づいている。『人口論』におけるマルサスの議論は、ゴドウィン(William Godwin)の急進主義を批判することから始まるが、それは一見合理主義的で科学的な装いを纏っているゴドウィンの議論の説得力が、じつはそのテキストの言語の美学的な効果に依存しており、その美学的な傾向がゴドウィンの錯誤の原因になっているとマルサスが考えるからである。マルサスは、人間の理性とテクノロジーのかぎりない進歩によって理想社会を達成するというゴドウィンの社会改革プログラムの中に機能している美的な言語の欺瞞的な力を暴露し、批判する。そして、ゴドウィンに対して、数学的公理と統計学に基づく人口理論と、それに基づく保守主義的な社会理論を突きつけるのである。だが、こうした一見反美学的なマルサスの合理主義の中に機能しているのは、人口の無限性と恐怖の感情とを結びつける美学的効果—とくに崇高の美学的効果—にほかならないのである。バークの崇高美学とマルサスの人口理論を並行して読解することによって、統計学的な数字に依存するマルサスの、一見合理主義的な議論に内包されている美学的要素があかみが出る。またそれによって社会理論と美学の隠れた、しかし密接な共犯関係が判明するのである。

第Ⅱ部は崇高、ピクチャレスクといった18世紀イギリスで人口に膾炙した美学的なテーマとワーズワスを論じる。第5章では崇高とピクチャレスクの問題を概観する。崇高とはそもそも修辞学と弁論術に起源をもつものであり、聴衆に興奮と熱狂を与えるための言語運用の技術であった。だが、崇高は18世紀のイギリスで、視覚的な自然美を記述するための美学的なカテゴリーとなったのである。しかし、18世紀の崇高に関する議論の中には、崇高が視覚的、感覚的なものではなく、言語的なものであると考える根強い思想的な水脈が存在している。ピクチャレスクという概念は崇高よりもさらに厳密に視覚に限定された美学的概念である。だが、ピクチャレスクが実際におこなうのは、視覚的な自然美の模倣ではなく、自律した約束事の体系によって自然風景をコード化することなのである。崇高、ピクチャレスクといった美学的なカテゴリーと言語の関係に焦点を当てることで、自然のイメージの「構築性」があきらかになるのである。この章ではさらに崇高やピクチャレスクの観念を、ロマン主義とくにワーズワスがどういったかたちで受け継いでいるかを検討する。崇高、ピクチャレスク、ロマン主義は、自然の美を感覚的なものとして把握しようとする美学的な傾向性と、自然は言語的・記号的な構築物であるという修辞学的な洞察をとともに内包し、その間を揺れ動いているのである。

第6章ではワーズワスの「墓碑銘論」(*Essays upon Epitaph*)を分析する。現代のロマン主義批評は、詩

的言語における自然と意識の統一というロマン主義的な理想の中に、ある種の神秘化と欺瞞を見出す懐疑的な立場をとっている。言語的転回以降の現代批評は、言語は意識にも自然にも還元できない独自のメカニズムと存在様式をもっており、詩が言語で書かれるものである以上、自然と意識の無媒介の融合という理想は、到達不可能であると考えるのである。だが、それは現代批評がロマン主義文学よりも優れた洞察をもってしていることを意味しない。ワーズワスの「墓碑銘論」を精読することによってあきらかになることは、ロマン主義の詩人は、言語が場合によってはそれを操る人間の意図を裏切り、挫折させる自律的で危険な性質をもってしていることを十分に認識していたということである。「墓碑銘論」の中には、詩的言語の力によって永遠性を獲得しようというロマン主義的な憧憬が、たしかに存在している。しかしそこには、言語がもっている自律的で非人間的な物質性によって、人間の意識が篡奪されてしまうことへの漠然たる不安もまた存在しているのである。「墓碑銘論」は崇高を正面きって論じてはいないが、有限な人間が死に対してもつ畏怖の感情をあつかっているという点で、崇高美学の系譜に入ることはまちがいない。ここではとくに、自然に対するロマン主義的憧憬が、自然の物質性に対する「恐怖」と二律背反的に結びついていることをあきらかにする。

第7章は、ワーズワスの『序曲』(*The Prelude*)における自然と想像力というテーマが、いかに当時のイギリスにおける都市化と商業化の問題と結びついているかを分析する。自伝的な物語詩『序曲』は、あきらかに叙事詩として構想されている。叙事詩というジャンルが伝統的に公共的な価値をあつかうものである以上、ワーズワスが『序曲』を叙事詩として書いたという事実は、個人の内面的な成長という主題が、公共的な意義をもっていると彼が信じていたことを意味する。ワーズワスは、商業化と都市化がもたらす道徳的墮落に対する処方箋として、自然の内面化を可能にする詩的想像力の重要性を強調する。ワーズワスは、近代の商業社会は共同体や人間の日常的経験を断片化することで、人間の徳性を損なうと考える。『序曲』の核心にあるワーズワスの企画は、自然との交流によって想像力を陶冶することで、商業化と都市化によって断片化された人間の経験をふたたび統合する教育的な機能を、文学に託すということである。上述したように、ヒュームやアダム・スミスは、洗練された想像力で粗野な想像力を統治するということを企てた。詩的な想像力によって、商業がもたらす想像力の墮落を防ごうというワーズワスの企画が、18世紀の道徳哲学の系譜に属するものであることはまちがいない。ワーズワスの特徴は、想像力と感受性の洗練を、文学とくに詩と結びつけたことである。詩的言語の特権性という理念は、ロマン主義を特徴づけるものである。『序曲』と『叙情民謡集』(*Lyrical Ballads*)の「序文」をあわせて読解することによって、いかにロマン主義の想像力論が、18世紀の美学や道徳哲学と、商業と徳の両立可能性という課題を共有していたのか、また同時にロマン主義の想像力論が18世紀的道徳哲学をどこで袂を分かつているのか、といったことがあきらかになるだろう。

第Ⅲ部は、コールリッジの中期以降の性格が異なるいくつかの散文テキストをあつかうが、中心となる論点はほぼ共通している。その論点は、コールリッジの美学理論は社会的・政治的な要因によって動機づけられ、決定されているということである。注意すべきことは、コールリッジは、自分の美学理論の政治的な動機づけを、けっして隠してはいないということである。彼は時事的な政治的、社会的問題について発言を止めたことはなかったし、彼のテキストにおいては、想像力や象徴といった美学的な概念はおおびらにイデオロギー的な役目を果たしているのである。そうした美学的概念装置は、一見して偶然的に起こるように見える歴史的、社会的出来事を包摂する、普遍的で全体的なヴィジョンを提供するのであり、それは多くの場合既存の社会制度に意味づけを与え擁護する保守主義的な機能を果たしている。第8章は『政治家必携』(*The Statesman's Manual*)で展開されている象徴理論の問題をあつかう。このテキストでコールリッジは、同時代の社会的混乱を解決するための政治的洞察を得る方法として、

『聖書』の言語の象徴性を研究することを読者に薦める。コールリッジによれば象徴とは、普遍的で超越論的な意味が言語記号の中に宿ることであり、『聖書』の言語は、神の意志が人間の言語に内包されているという意味で、象徴的な構造をもっているのである。ここでのコールリッジの目的は、時間とともに移ろってゆく歴史的世界と普遍的・超越論的な原理を結合するモデルを構築することであり、象徴はそうしたモデルの名前にほかならない。具体的な社会制度と神の摂理を結合する象徴のモデルによって、コールリッジは、彼が擁護しているイギリスの伝統的な社会制度を正当化する理論を作り出したのである。本章の目的は、「時間性」の問題をひとつの契機としてコールリッジの象徴に関する議論を分析することによって、象徴理論のイデオロギー性をあきらかにすることである。だが、彼の象徴理論がイデオロギーであるということは、それが脆弱であるとか無意味であるということをもまったく意味しない。『聖書』解釈学と政治理論の奇妙な結合から生まれたコールリッジの象徴の理論は、20世紀後半にいたるまでロマン主義的な文学解釈のパラダイムとして機能しつづけた。コールリッジのロマン主義的なイデオロギーの瞠目すべき強靱さの源泉を解明することこそが、この第Ⅲ部全体のテーマである。

第9章は『文学的自伝』(*Biographia Literaria*)における読者の問題に焦点を当てる。コールリッジの『文学的自伝』は、文学作品の有機的統一性を主張するロマン主義美学の中心的なテキストとして受容されてきた。しかし、『文学的自伝』のテキストそのものが断片的で不連続な形態をもっているということが、長く研究者たちを戸惑わせてきた。最近の読者論的な批評は、『文学的自伝』のテキストには読者の積極的な参加を求める巧妙な仕掛が施されており、テキストの空隙や断片性はその仕掛にほかならないと主張している。だが、こうした読者論的な解釈における「読者」は、奇妙なまでに非歴史的なモデルにとどまっているのである。『文学的自伝』を精読するなら、読者はコールリッジが同時代の読者大衆の勃興と文学の商品化に対して不安な感情と不満を抱いていたことがわかる。本章の目的は、『文学的自伝』のテキストの内容面と構造面の両方の中に、市場原理の圧力が作用した痕跡を探り出し、コールリッジが文学の商品化の圧力に対してどのような防御の戦略を取ったのかを解明することである。それによって、『文学的自伝』にさまざまなかたちで登場する「読者」を歴史化し、読者論批評が与えてくれた「読者」の役割に関する洞察を、さらに意味深いものにすることができるのである。

第10章は、『教会と国家の構造について』(*On the Constitution of the Church and State*)を中心とする後期の散文作品における、知識人と文化の問題を論じる。コールリッジの文化理論において浮かび上がってくるのは、美学的なものとの政治的なものの密接な関係である。コールリッジの政治理論は、彼の想像力理論の政治の領域への適用として理解すべきなのである。コールリッジのロマン主義のイデオロギー的な強靱さを理解するためには、彼の理論を歴史化して、彼がどういった社会的、政治的な問題に解答を与えようとしていたのかを理解する必要がある。そのために、本章はコールリッジの政治的言説における商業の地位に焦点を当てる。コールリッジのイデオロギー的役割は、土地の利害(*landed interests*)と貨幣の利害(*monied interests*)の調停者としての機能に見出すことができる。コールリッジは、社会の相対立する利害が理想的に調和する場としての「文化」の領域を構想したのである。その調停を実行するのは、調和を実現する力としての美学的な想像力にほかならない。コールリッジのテキストを精読することによって、美学的なものがイデオロギー的な力をどのように獲得するのか、そしてその力がどのように修辞的な言語によって構造化されているのかがあきらかになるのである。

『美学イデオロギー』というタイトルを本論文に付したのは、シャフツベリーからコールリッジまでの何人かの重要なイギリスの文人たちの理論的な企画を包摂する概念として、「美学イデオロギー」(*aesthetic ideology*)という概念がきわめて有効だからである。外的な規則に制御されることなしに、ばらばらな細部が有機的な全体性を構成する芸術作品は、個々の市民が自由に自らの利益を追求しながら

も、結果的に秩序ある全体を形成する理想的な市民社会のモデルとなった。だが、理想的な市民社会が形成されるためには、それぞれの市民が社会的調和につながる規則を直感的に察知し、それに自発的にしたがうような道徳的かつ美学的な訓練が必要になってくる。そうした環境の中で、文学や芸術のイデオロギー的役割は、従来にないほどまでに大きなものとなっていったのである。コールリッジに典型的に見られるように、美学的なものイデオロギー的な力はロマン主義においてもっとも大きな力を獲得する。ロマン主義のイデオロギーのもっとも大きな貢献は、精神的な価値と商業的な価値の両立を可能にするヴィジョンを提示したことであろう。コールリッジやワーズワスといったロマン主義者たちは、近代化や商業化に対抗するヴィジョンを提示するわけであるが、それは商業社会を転覆するためではなく、精神的な価値と商業が両立するような「文化」という制度を構想することを目的としていたのである。いうまでもなく、近代において文化の中心に位置していたものこそ「文学」である。多くの高度に産業化された国家の大学において「文学」なるものが教えられて、そのことが格別疑問視されてこなかったとしたなら、それはロマン主義のイデオロギーの成果にほかならない。だが、もし現代において文学の価値に対して疑問符が付けられ、大学で文学を教えることが困難になりつつあるとしたら、それは近代そのものが終焉を迎えつつあるということの証左なのかもしれない。文学の危機の時代にあって、想像力の問題はますます重要なものとなってゆくであろう。

論文審査結果の要旨

本論文は、イギリスの18世紀からロマン主義の時代にかけて、さまざまな思想家が取り組んでいたイデオロギー的な問題を明らかにしようと試みたものである。この時代で最大の思想的問題は、商業の急速な発展によって社会にさまざまな矛盾や軋轢が生じているという現実を前にして、人間の欲望に基づく商業活動と人間の徳との関係をいかに調整するかということであった。本論文は、シャフツベリー (Anthony Ashley Cooper, the Third Earl of Shaftesbury, 1671-1713) からコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) に至るまでの、代表的な思想家の著作を精緻に読み解くことによって、政治経済学 (Political Economy) と徳との関係という問題を受容性や趣味、さらに礼儀作法等の洗練の問題すなわち美学によって解決しようとする企図がこの時代の思想テクストを支配するイデオロギーであったことを明らかにしようと試みている。ここでいうイデオロギーとは、「言語テクストによって表現された、ある統一性とまとまりをもった世界観」のことであり、アルチュセール (Louis Althusser, 1918-90) 以来の新マルクス主義批評で使用される概念である。興味深いことは、シャフツベリーなどの18世紀思想家は、人間の商業活動の暴走を抑制する力として理性を措定するのではなく、人間の感情あるいは情念の中にそれが存在すると考えていたことである。欲望と徳は同じ根源から発するのであり、私利私益を追求しようとする欲望は、善や美を愛する人間の本能的で自発的な情動によってコントロールされる。それゆえに、商業と徳の関係という問題を解決しようとする企図は、美学をその根底に置くことになる。18世紀の道徳哲学が、人間の情動を美学の立場から解明し、徳のシステムを確立しようとしたことは、そのイデオロギーがまさに「美学イデオロギー」と呼ぶにふさわしいものであることを示している。本論文は、この美学イデオロギーを、ヒューム (David Hume, 1711-76)、スミス (Adam Smith, 1723-90)、バーク (Edmund Burke, 1729-97)、マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) 等の代表的思想家の著作の中にとづけている。著者の分析手法は、明らかにデリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) およびその文学批評上の継承者であるド・マン (Paul de Man, 1919-1983) のデコンストラクション戦略に依存している。し

かし、本論文は、これら思想家のテキストがディコンストラクションによってはじめてその本質をあらわにすることを証明している。著者の精緻きわまりない精読は、スミスやマルサスといった資本主義経済学の始祖とされる政治経済思想家 (Political Economist) たちのテキストの中に著者のいう「美学的契機」(aesthetic moment、審美的契機あるいは唯美的契機とするのがより適切とは思われるが) が存在し、それが重要な機能を果たしていることを明らかにした。このことは、これら思想家の思想史上の位置づけに変更を迫るものであり、非常に重要な研究成果である。

本論文の後半では、ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の「墓碑銘論」と『序曲』、コールリッジの『政治家必携』と『文学的自伝』を中心として、ロマン主義の代表的作家・思想家たちが商業や政治経済学とイデオロギーや文学批評のかかわりについて、いかなる思索と文学的实践を行ったかが論じられている。ここでも徹底的な精読の手法によって、18世紀の思想を継承したロマン主義の文学、とくにコールリッジの著作が、美学によって商業の力を制御するための戦略を基盤としていることが証明されている。さらには、今日に至るまでの文学批評がこうしたロマン主義的美学に支えられてきたことの解明にまで至っている。これは18世紀およびロマン主義時代の美学が近代文学批評の根源であることを明らかにしたものである。このような研究成果は、イギリス文学のみならず、現代の人文主義的知の体系全体の存在基盤とその存在意義にまで及ぶ遠大かつ深遠な可能性を持つものと言える。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。